

# 教員は語る

第六回

― 芸大への期待・抱負・提言 ―

## 鈴木理策

助教授―美術学部先端芸術表現科

×

## 大橋萬寿子

助教授―音楽学部邦楽科（日本舞踊）



### 芸大の伝統と底力

**鈴木** 芸大の教壇に立ったのは、二〇〇五年に「先端」の授業にゲストで呼んでもらったのが初めてでした。それまで芸大に対しては、写真センターで定期的に魅力ある講演会や企画が組まれていたので、「写真に熱心」という印象を持っていました。

僕自身は、「先端」は多様なメディアを表現に用いていこうとする学科だと思っていましたので、その中で写真を使って制作する人のために呼ばれたと感じています。それは写真に特化して教えていくということではなく、美術の枠の中の写真が他の表現とどのように関わることができるか

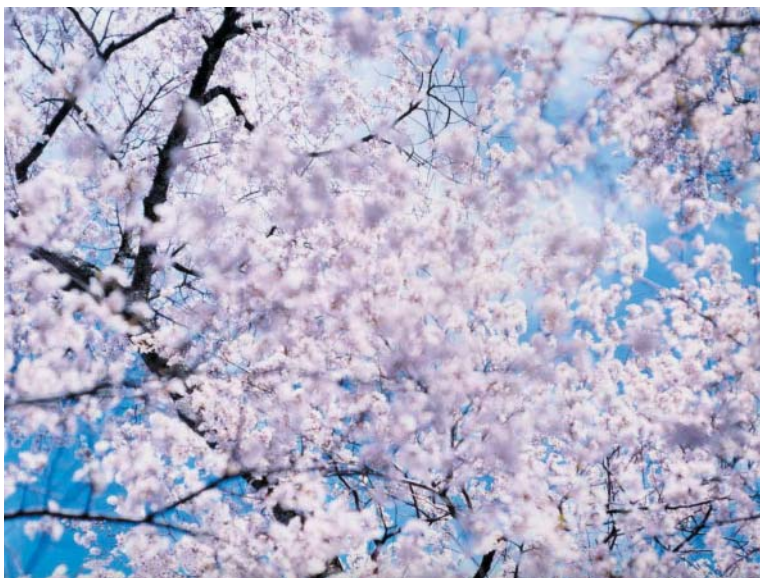
を考える機会にしたいと思っています。つまり、写真と美術の境界線はもはや重要ではなく、絵画や版画などの平面芸術のひとつと考えてもおかしくないと思います。

先日、IMA演習という授業で「フォトグラム」という手法を取り上げました。フォトグラムというのは、印画紙の上に直接物体を置いて、光を当てることにより、その影を写し取るという技法です。授業では時間や（空間）を画面に織り込んでゆく作業を二日続けて行いました。一日目は初めての経験ということもあり、勘所がつかめず、ずいぶんと悪戦苦闘していたようですが、二日目になると、光の量を加減することで陰影のコントロールができることが理解できて、仕上がったものもかなりおもしろくなりました。皆それぞれに個

性ある作品となっていて、芸大生には底力というか潜在的な意識の高さがあるのだろうと感じました。

**大橋** 芸大には一九九八年に、花柳寛はなやなぎひろし（芳次郎）先生が講師を辞めるのにあたり、非常勤講師という形で教える機会をいただきました。自分の弟子は教えていまして学校で教えるのは初めての体験でしたが、母が日本大学芸術学部の舞踊コースで創作部門を教えることを、十四、五年やっておりました。そういうこともあって、学生を教えることも私の範疇にあつていいのかなと思って、お引き受けさせていただきました。

私どもは実技を教えていますので、理論的に何かということではなくまず即体を使っていかに美しく踊るといことが大前提なわけです。私は花



[SAKURA]

柳流をやっておりますから、家にこられる方は大体同じお流儀の方たちがお見えになるわけです。ところが学校の場合は、違ってお流儀の方が入っていらつしやる。必ずしも花柳だけではないということです。

花柳流というのはものすごく振りが細かい。音楽に対して振りがものすごくいっぱい詰まっているんです。でも、せっかくそういう違ったお流儀を習うので、私もあえて花柳の特色のあるものを教えています。卒業なさればそれぞれのお流儀に帰っていただければいいのではないかなと考えています。花柳の場合、早くから新しいことに挑戦していたお流儀なものですから、古典でなく非常に新しい創作的なことも取り入れて教えています。私の初代も日本舞踊ですけれども、昭和初期に初めてオーケストラで踊ったり、橋本國彦先生のピアノの曲できている踊りもございまして、私は芸術大学というものに対してはあこがれもありましたし、親しさというものもありました。

### 境界を超えてゆく表現

**大橋** 私は歌舞伎の子役で初舞台を踏んだのですが、歌舞伎のほうは名前を置いたまま辞めまして、十五歳のときに吾妻徳穂先生がお流儀は違うので

すが、私を預かってくださるというお話があった、舞踊家になろうと自分で決心しました。最初のころは舞踊家というものをめざしたいと思ひまして、教えるというよりは踊ることに自分は専念したいと思ひました。

私の母は教えることと、創作・演出を専門にしていましたので、私はその素材でありたいと思つて、ずっと舞踊家という立場をとって来ました。そういうことを強く思つてアメリカへ行つたのですが、踊ることと教えることをきちんと分けてもいいのではないかと感じて帰ってきたんです。クラシックバレエでもプリマで踊っていらしても、ある年代が来たら教えるほうに回られるでしょう。私もこのお話をいただいたときには教えるのにおさわししい年齢にもなっていたので、芸大に参ることになりました。

**鈴木** 僕が写真を勉強したのは重森弘淹という写真評論家が創立した学校で、就職のための技術伝授が第一義というよりも、表現としての写真を学ぶ場であるという雰囲気がありました。印画紙は物質ではなく、そこにいかなるイメージを手に入れるかを学びました。一方でその頃、美術作家の方が写真を素材として制作した作品を発表されていて、佐藤時啓さんや小山穂太郎さんら芸大出身の方たちに注目していました。



鈴木理策（すずき・りさく）

一九六三年和歌山県新宮市生まれ。八七年東京総合写真専門学校研究科卒業。八五年からグループ展に参加するなど写真家活動を開始し、九〇年初個展。一九九八年東京から故郷熊野への時間をまとめた写真集『KUMANO』を出版。写真集『PIES OF TIME』により第二十五回木村伊兵衛写真賞受賞。吉野桜、熊野などを主題に、写真と不可視性の関係を探求する作品を発表し続ける。二〇〇六年から現職。



創作舞踊劇場公演「薔沙薇の女—カルメン2003—」

亡くなられた榎倉康二さんの存在はとても大きかったと思います。芸大で教えていらしたそうで、ご自身は油絵を学ばれましたが、僕は彼の写真の作品に大変興味を持っていました。

榎倉さんは、例えば絵を描いていったときに、素材として絵の具を使っているというよりは、絵の具自体がキャンバスの布に乗っかる瞬間に「それは物質のひとつである」と考えました。キャンバスに塗るとか描くのではなく、絵の具を付着さ

せるという意識。写真に関して、写真を写すという考えではなく写真が写る、写ってしまうという即物的な事実を受け入れ求めていったのではないのでしょうか。それは僕なんか習ってきた写真の中で見過ごしていた部分だと感じています。自分は「写真の本性とは何か」と同時に写真を越えていくものを学生に伝えたいと思っています。いわゆる写真と、例えば映画や絵画や彫刻といった写真と異なるメディアとの境界線を想定し、それを見ていくことで写真が何なのかを一緒に考えていきたいと思っています。

## 時代性と持続性

**鈴木** 芸大は油画や彫刻のような「メチエ」や基礎がしっかりとある学生がいて、それをベースに立ち上がってくる表現があると思うんですけども、「先端」の場台、そのメチエの部分は「思考」と考えるとわかりやすいかもしれません。ただ、制作に積み上げた時間や技術が前面に出ていないために、安易に見えて曖昧な印象を与えてしまうかもしれません。そこで大事なことは、なぜ作者にとってその表現が必要なのか、だと思うのです。でき上がった作品が作者にいかにか帰属しているか、その点を意識して制作することによって、おもしろいものが出てくると思うのです。そうした意識を持続させることは、大変難しいことかもしれませんが、だからこそ魅力あるものとなるのでしょう。

常に作品と向き合い「なぜその表現なのか」を問い続けることは、自分がこれまで作家としてやってきた中で得たことであり、そこに大きな可能性があるということを学生たちに伝えたいと思っ

ています。

**大橋** 私の師である吾妻徳穂先生は「吾妻歌舞伎」というものをつくられて、昭和二十九年にヨーロッパ公演、それからアメリカ公演もなさったんです。そういう意味では海外へ向けての大変な先駆者なんです。先生が永住権を取ってアメリカへ渡るといふので、うちの両親も、「これから世界も狭くなるから、アメリカへ行ってみるか」と言うもので、十七歳で三代目になって、その年の夏に渡米しました。

ロサンゼルスで吾妻先生に学んだ後、ニューヨークではマーサ・グラハムの学校で舞踊を教わったり、演劇の学校にも通ったのですがここはおもしろかったです。私たちは、コップ一杯の水がここにあると想像して、それをここへ移しなさいということと言われるわけです。するとクラスの人はいもう大変で、ああでもない、こうでもないと考えるわけですが、私たちは常にそういうことをやらされてきたんですね。お扇子ひとつでいろいろなものを表現するという所作事でやっているわけです。いわゆる新劇では、コップを移すときに、私はけさ起きてどういうことをしてここに来た、ということから考え始めるみたいで、それがリアリティということかと新鮮に感じましたけれども、私たちはいつも所作事でやっている。しかし、その裏側にひそんでいることを考えさせられました。踊りというのは、基礎が違うことであって、身体表現の方法というのは同じではないかと私は思います。私の基礎は日本舞踊です。でもコンテンポラリーの方も、クラシックバレエの方も音楽にのせて、自分たちがイメージしたことを踊りなさいと言ったら、そんなに苦労なく踊れるということが大きな魅力じゃないかと思うんです。

その時代に即したものを創り、また、古典もしっかりと踊ることが日本舞踊ですから、非常に柔軟性があつて時代とともに動いていきます。でもその中でもすごくいいものが古典として残っていく。「歌舞伎十八番」というのも初演のときは新作だったわけですが、何百年経つてもみんなが伝えていって、確固たる古典として残っている。これも現代に生きる私たち人間が表現するものなので、やっぱり匂いは違うと思います。寸分違わずということはないということが、その魅力にもつながると思っています。

## 深めていくこと、 拡げていくこと

大橋 踊りの場合は、経験ということがとても重要なんです。舞台というのはいろいろな積み重ねによって成り立ってくるので、自分の中にそれが栄養になつているかを、見て取つて、受け取つてくれるかということだと思ふんです。方程式みたいなにはとても教えることは不可能な作業だと私は思います。個人の受け取る側の感性もあるし、その人の才能を察知して、いい方向であればそれを伸ばしてあげる。そういうことを手伝つてあげられればいいのかとも考えています。

芸大には、古くから山田抄太郎先生が、いわゆる邦楽、長唄を、伴奏者ではない演奏家として認められることを目標になさつて邦楽科ができたこと伺つています。演奏だけで楽しませるといふことを提唱なさつて、オーケストラと同じように邦楽というものを考えになつて、数々の名曲が創られてきました。

日本舞踊が東京芸術大学に入らせていただいたということは、今までは町のお師匠さんの延長線上のものとして考えていらした人たちに、大学でもきちんと扱っている科目と思つていただける、ステータスができたことと嬉しく思っています。また、昔は花柳界が日本の文化にとつて大きな役割をしていて、それによつて芸というものが庶民に伝わつてきたということもあるので、今それが廃れて、古曲をやる方たちがほとんどいなくなつてしまつたということは、日本の伝統的な文化に関してはもつたない部分だと思ふんです。

私は生徒にせっかく入学できたのだから、邦楽だけじゃなくて、洋楽の方や美術の方たちとも友達になつて、芸祭のときは、なるべく皆さんでそういう交流を持つていけば、今度自分が卒業したときに、いい意味で世界が広がるのではないのでしょうか。日本の踊りの中だけにいると、なかなか自分が求めても広がつていかないわけです。学

生のまだ自分ができ上がつていないというときにさまざま人と交流ができるのはすごく幸せなことですから、それを大切にしなさいと私は言つています。

鈴木 ベースにあるものが違つと、ものの見え方もだいぶ違うので、それが僕にはとてもおもしろいなと思います。深さはもちろんだけれども、幅もやはり必要だと。世の中には実にさまざまなものの見方があるわけで、自分の作品がどのように受け取られるか、できるだけいろいろな声に耳を傾けたほうがいい。たとえ自分の考えと相反する意見があつても、学生時代にどれほどの見方が多様であるかを知り、そうしたものにいかに多く触れるかということは、とてもよい経験になると思います。僕自身はいわゆる写真学校で教えるようなことを芸大の中でやつても仕方がないのではないかと考えています。ただ、写真の本来持っている魅力についてはしっかりと伝えていきたいとは思つています。

学生は、自分の学科も含めていろいろな形で先生の知つていることを手に入れていくというのが大事なのではないでしょうか。創り手として優秀な人はすごくいい目を持っているので、自分の創るものや作業についていかに見えるのか、もっと積極的に意見を求めていくべきだと思います。



大橋萬寿子「花柳寿美」(おおはし・ますこ「はなやぎ・すみ」)

一九四一年東京都生まれ。四六年六代目尾上菊五郎丈の部屋子となり尾上菊花の名を許される。五八年二代目花柳寿輔師より、三代目花柳寿美の名を許される。五九年からアメリカに留学し、吾妻徳徳、マーサ・グラハムに学びモダンダンスを習得。芸術選奨文部大臣新人賞、舞踊批評家協会賞、花柳寿応賞新人賞などを受賞。二〇〇六年から現職。